あおもり産木材地産地消ガイドブック XIV

地元の山の木で建てた
青森県産材の家

ふるさとの木を生かし　山を守る

巻頭特集

中里政義棟梁
現代の名工受章

青森の木で建てる
数寄屋の技

青森県木材利用推進協議会

「SDGs」な暮らしてみませんか。

地元の山から伐り出した県産材で
家を建てる人が増えているそうだ。
ふるさとの山で木を育て、
そこから伐り出した木で家を建て、
そしてまた木を育てるというサイクル。
それはとってもエコなことらしい。

最近よく耳にする「SDGs」。
「持続可能な開発目標」って
意味らしいけど、
県産材で家を建てて住み続けることも
ひょっとしたら「SDGs」かも。

あおもり産木材地産地消ガイドブック XIV

地元の山の木で建てた 青森県産材の家

ふるさとの木を生かし　山を守る

目次

[巻頭特集]中里政義棟梁が「現代の名工」受賞 …… 001

2023年度第16回
あおもり産木材活用建築コンテスト作品集

建築コンテスト表彰式 …… 007
〈住宅新築部門〉
木づかい大賞 …… 008
木づかい賞 …… 009
木づかい賞／県民投票賞 …… 010
〈住宅リフォーム部門〉
審査員特別賞 …… 011
県民投票賞 …… 012
〈非住宅その他木質化部門〉
審査員特別賞 …… 012
応募作品 …… 013

地産地消に取り組む大工・工務店

有限会社岩木建設 …… 016
株式会社大山建工 …… 024
有限会社キーポイントホーム …… 032
企業組合県木住 …… 040
チーム県産材 …… 056
有限会社大坊建設 …… 062

すすめよう木材の地域循環

株式会社今井産業 …… 070

青森県木材協同組合組合員名簿 …… 074

[広告]青森県製材JAS認証工場 …… 075

〈表　紙〉
2023年7月にオープンした県木住造道展示場(『アーバタウン造道』)の玄関ホールの「ガラス障子」
〈裏表紙〉
チーム県産材が2023年12月に開催した『縁むす日』第2回で「青森県林政課」の木育体験コーナーに出品された〝木形〟のおもちゃ

巻頭特集

中里政義棟梁が現代の名工受章
青森の木で建てる数寄屋の技が評価

講演会場の壇上に中里政義棟梁(㈱大山建工)と、建築家の前田伸治氏(暮らし十職一級建築士事務所代表、伊勢市)が並んで座った。全国各地に建ててきた数寄屋建築の施工例をスクリーンに映し出しながら、令和4年度「現代の名工」を受章した中里棟梁の仕事を振り返る趣向だ。青森県産材を使い、東京や千葉、博多などの遠方へも赤松や杉を搬送して、中里棟梁率いる〝大山の大工衆〟が現場を納めてきた。大径木から挽く細かな木目と木肌の美しさを生かした数寄屋造り。その空間に住まう人の心に染み入ってくる情趣が、日本建築の伝統を受け継ぐ名工の技である。

【建築大工で3人目】

「現代の名工」とは、ものづくりで卓越した技能を持つ職人や技能者を厚生労働省が毎年表彰する制度。各分野の技能を広く知ってもらい、次世代への継承を目的に昭和42年度(1967年度)から始まった。過去56年間に青森県から建築の仕事で選ばれた大工はわずかに5人。「宮大工」が2人、「建築大工」が3人で、その3人目が中里政義氏(67歳)だ。この道一筋、技を極めた熟練者の中から選び抜かれて授与される称号が「名工」である。

受章が報じられたのは2022年の11月。東奥日報(同年11月12日付)で『数寄屋の美求め研鑽』の見出しで載った。記事の中で中里氏は、「千利休の茶室造りを源とする優美な数寄屋建築は、宮大工による神社仏閣の建築様式とは異なる」と話している。一般住宅に歴史ある数寄屋建築を取り入れた前田伸治氏の設計と、青森の木にこだわる大山建工の地域に根差した企業姿勢も併せて評価されたのだ。

大山建工の加工場で加工されるアカマツの八角形の丸太梁

「青森の木」をテーマに講演する青森県林政課の工藤真治課長

受章記念講演会が２０２３年４月、八戸市のホテルで開かれた。主催は、ＮＰＯ法人あおもりの木で地域を支える「伝統と技術」の会（大山重則理事長）。建築を学ぶ学生や関係者など１１０人が参加した。第１部で県林政課の工藤真治課長が「青森の木」をテーマに講演、第２部で前田伸治氏が「中里政義棟梁との仕事」について、中里政義氏と共に建築現場の思い出を振り返った。

岩手県の県北と青森県の県南にしか残っていない希少なアカマツ

【青森県は木の宝庫】

工藤課長は講演の冒頭、三方を海で囲まれた青森県の地域環境が山に多種多様の植生を育んでいる――ことを改めて踏まえ、こう述べた。

「日本海側の多雪地帯にはブナが育ち、海に突き出た空中湿度の高い津軽半島や下北半島にはヒバが育ち、太平洋側の乾燥した県南地域にはアカマツが育っている。スギの人工林の面積は日本で４番目に多く、銘木として知られるヒバもあれば、アカマツもクリもあるし、広葉樹のブナも日本一豊富にある。一つの県でこれほど多種多様な樹木が生えているのは全国で青森県だけです」

樹種によって、〝個性〟もそれぞれ異なる。強度が強いとか弱いとか、耐朽性や耐蟻性などの差となって現れる。耐朽性が強いのはクリで、そのことを大昔から三内丸山の縄文人は分かっていてクリを柱などに使っていたのだから〝木を見る目〟があったのだ。

耐朽性や強度の違いに加え、乾燥すると反るとか、ねじれるとか、割れるといった木の特徴を知ったうえで、耐朽性があるヒバは土台に、曲げ強度が強いマツは梁にと使い分け、技術を積んだ大工がじっくりと時間をかけながら建てていたのが昔の家づくりであった。

「ところが大量生産、大量消費の時代になって、消費者は、待てなくなりました」と工藤課長。

「買ったモノはすぐほしい。すぐ手にしたい。家も、すぐに完成して、すぐ住みたい。そうなると、木を１本１本吟味し、カンナをかけノミで刻んでという手間のかかる建て方では追い付けなくなったのです」

そこで、誕生したのがエンジニアリングウッド。構造用集成材や構造用合板、ＬＶＬ（単板積層材）などがそれで、外国から木材を大量に輸入して大量に製造し、ニーズに応えた。品質が均一だから、木の反りや、ねじれなどもなく、知識や技術がなくても誰でも家を建てられるようになった。プレカットした材料を現場で組み立てれ

ばいいだけなので、完成も速い。「県内の多くのスギがLVLや合板などに加工される一方で、青森ヒバや、岩手県の県北と青森県の県南にしか残っていない希少なアカマツ、柾目の綺麗な柱が挽ける大径のスギなどは、大量生産のシステムにはそぐわないのです。土台にはヒバ、梁にはマツと、それぞれの木の持つ個性に適した場所に使うことが、もともとは建築用語であった〝適材適所〟です。木を使い分け、技術ある大工さんにじっくりと建ててもらうのも家づくりの選択肢の一つであり、今後の青森の木を生かす道でもあるわけです」

タテ石材（八戸市、2009年竣工）

【茶室学びに京都へ】

16歳で大工の修行に入った中里政義氏が、50年を経て「現代の名工」に至る間には、運命を決定づける2人の人物との出会いがあった。1人は大山重則氏（大山建工会長）。もう1人は建築家の前田伸治氏だ。

S様邸（東京都、2010年竣工）

大山氏が大山建工を創業したのは1979年。同じ五戸町出身の中里氏が大工として入社し、以後、共に歩むことになる。『1部上場企業の会長宅の茶室普請を請け負った』（東奥日報2022年11月12日付）のは創業から5年後のこと。それが転機となった。茶室の設計者は、㈶京都伝統建築技術協会設立者の故中村昌生氏。大山氏は茶室を学ぼうと京都に中村氏を訪ね、知遇を得た。入会した同協会で、会員の前田伸治氏と出会う。京都の伝統建築を熱心に勉強に通う大山氏と中里氏の案内役を務めてくれたのが前田氏であった。

料亭『嵯峨野』（福岡市、2012年竣工）

24年前、前田氏は、仙台に建てる数寄屋建築の住宅の仕事で大山氏と再会する。「まさか大山さんと一緒に仕事をすることになるとは思っていなかった」

その住宅は初め、施主が地元工務店に工事を依頼する予定だったが、前田氏の設計図を見て、「とても建てられない」と辞

W様邸（松戸市、2014年竣工）

退を申し入れてきた。数寄屋建築が得意な工務店が八戸にある、との評判を聞き付けた施主が、白羽の矢を立てたのが大山建工であったのだ。

仙台の現場に使う木材の下見に前田氏が大山建工を訪れる。大山氏は自社の加工場（五戸町）だけでなく、近隣の山へも案内した。前田氏は驚いた。太くて立派な杉がある。赤松もあればケヤキもある。栗や楢もある。たくさんある。まさに木の宝庫だ。

「もっと驚いたのは、赤松が製紙の原料のチップとしてしか使われてなかったことです。実にもったいない」

この赤松を建築用材として使う方法はないか。前田氏が考え付いたのが「梁」であった。八角に落とした丸太梁。伝統工法の〝木組み〟で交互に組み合わせたダイナミックな野性味と、数寄屋建築の繊細な情趣とが融合した〝上質な木の空間〟の誕生であった。

大山氏はその家づくりを広める拠点として八戸市内のニュータウン（東白山台）に常設住宅展示場を建て、話題を集めた。地元だけでなく、評判は東京や千葉、北海道へも広がっていく。住宅に留まらず、九州・博多の料亭『嵯峨野』や、東京・深川の慧然寺の庫裏・書院も建てた。出向いた社員大工たちが現地に寝泊まりしながらの共同生活を通じて〝技〟は若手に伝えられた。中里棟梁の一番弟子の細越克憲大工は副棟梁を務めるまでに力をつけた。

スクリーンに映し出された料亭『嵯峨野』（2012年竣工）の写真を眺めながら、前田氏が、「あのときはたいへんだったね。一時はどうなることかと思った」

建設中に大間題が起きたのだ。東日本大震災の勃発であった。道路が絶たれ、八戸から木材を運べなくなった。急遽、地震の影響がない日本海側回りで長さ10mの木材をトラックで運んで乗り切った。

「それと……苦労したのは言葉だね」と実感のこもった中里氏の話しぶりに場内は笑いに包

社員大工たちにより披露された上棟式で行われる槌打（ついだ）の儀

自宅建築中のエピソードを語る川口弘志さん

料亭「嵯峨野」の藤井春奈子女将

臨済宗建長寺派第二四〇世　吉田正道老師

まれた。「言葉が通じないものだから、それでなくても九州の大工にすれば青森の大工が乗り込んできたかたちで、対抗意識があるわけですよ。言葉さえ通じればあれほどぎくしゃくすることはなかったんだろうけど、最初は穏やかじゃなかったね」

「それを、中里さんは実にうまくまとめてくれた。人柄だね。謙虚さが自然に人と人をつなぐんだね。あれも一つの技能だ。それがあってこそ現場は納まる」と前田氏は讃えた。

【〝天気を見る目〟も】

講演会後に祝賀会が開かれた。臨済宗建長寺派第二四〇世の吉田正道老師や、博多から駆け付けた料亭『嵯峨野』の藤井春奈子女将が祝辞を述べた。

15年前に大山建工の展示場を見学して感動したという川口弘志さんは、展示場の棟梁を務めた中里氏指名で八戸市内に自宅を建てた（２００８年度第１回あおもり産木造住宅コンテスト最優秀賞受賞）。「展示場を見にいったときに中を案内してくれた人が中里棟梁だったんです。実にていねいな応対で、腰の低さに人柄が現れていました。惚れ込んで、ご指名で建てさせていただきました」

建築中のエピソードを披露した。

「曇ってきた空を指差して中里さんが、あと30分で雨が降ってくると言ったんです。敷地内に積んである木材に中里さんがブルーシートを掛けているうちにぽつぽつと落ちてきて、30分後には本降りになっていました。天気を予見できることに驚きましたけど、木を大事なものとして取り扱う姿に本物の棟梁を見た気がしましたね」

山を見、木を見、天気を見る目をも持つ「現代の名工」。中里棟梁は謝辞で、「さらに技術を磨き、後輩たちに引き継いでいきます」と決意を述べた。

中里氏は「五戸代官所」の復元で棟梁を務めた

中里政義棟梁が今から25年前に棟梁を務めた歴史的建造物が、五戸町の「歴史みらいパーク」にある。五戸町図書館に隣接して建つ茅葺き屋根の「五戸代官所」だ。１９９８年に地域住民の生涯学習と憩いの場として中心街に公園が整備され、代官所は㈱大山建工の施工で復元された。

五戸代官所が設置されたのは寛永12年（１６３５）と推定される。長い歴史の間に何回か建て替えられ、現在のものは文久年間（江戸時代後期）に再建した際の平面図を基に再現されたものという。明治２年（１８６９）まで約２３４年にわたり五戸通りの三戸郡下13ケ村、北群下15ケ村の司法・行政・警察権を統括する司法斗南藩奉行所であった。明治４年（１８７１）に廃藩置県に伴い廃止。明治５年（１８７２）に青森県民事堂（県庁）五戸市庁舎となり、その後、五戸小学校として明治27年（１８９４）まで使われた。

斗南藩との関りなど五戸町の歴史に触れてもらおうと10月７日（２０２３年）、ＮＰＯ法人あおもりの木で地域を支える「伝統と技術」の会（大山重則理事長）が同代官所で勉強会を開催、県文化財保護協会の滝尻善英会長が講演した。

挨拶で大山理事長は、代官所の柱はヒバ、梁はアカマツ、内壁はスギなど県産材を使い、釘を使わず筋交のない伝統工法で建てた建物が東日本大震災にもひび一つ入らなかった強さと、大工の技術を強調した。